

無碍の一道

だれでも老いを感じる」とはさみしいことです。身に病あれば何とかして治したいと願います。死が迫つてくると一日でも半日でもそれを避け生き延びたいとあがきます。

人は老いやくもの死にゆくものと知れば知るほど、いや、わしはまだまだ若い、わしはまだ死ぬはずがないと、それこそ懸命に自分の目をふさぎ、自分の心をこまかして、老や病死から逃げ回ります。自分の力で、逃げ切れないと思つた人は、薬をもつかむ思いから、神や仏にしがみついて、「(ジ)利益(りやく)」をねだらうといたします。

お釈迦様がお亡くなりになるその時に、「(ジ)代の説法のまとめとして、次の言葉をおのこしになりました。

「すべてのものは過ぎ去り移り変わる。だからつとめ励みなさい」

老や病や死からどんなに逃げようどこころみても、あるいは必死に祈つても、しょせん、逃げ切れるものではない。いやむしろ、変化し移りゆくこと「無常」それが世のまぎれもない事実なのだ。だとしたら、その移ろいゆくのちをうつろいゆくままに、堂々と生き死ぬることにつとめ励むべきである。お釈迦様はそうおつしやつていてるのでしよう。

老を無駄にしないで輝かしく生きる力。病から逃げるのではなく、病にていねいに取り組む力。死ぬるいのちを無駄なく生きる力。そんな活力をめぐまれること、それがほんとうの「(ジ)りやく」ではないでしょうか。

「念仏は無碍の一道なり」(歎異抄)

浄土真宗の開祖親鸞聖人は、そうおつしやつています。「無碍」とは、何ものにも邪魔されないで、どこにでも堂々と、輝かしく生き死

んでいる活力。それを与えて下さるのが、南無阿弥陀仏のお念仏だとおつしやるのです。

なぜなら、南無阿弥陀仏のお念仏は、どこでもいつでも響いてくださる如来さまのいのちの呼び声でありますから。

(前住職テレホン法話集より引用)

入学おめでとうございます

四月から、小学校に入学されますみなさんにお祝いのメッセージとプレゼントをお送りいたします。新しい環境に戸惑うことも多いでしょうが、ぼちぼちいきましょうね。そして、しっかりお話を聞いて、賢い子にそだつてください。

大石千翔くん　出合市場(純一郎様方)
濱あきらくん　上小田(美知代様方)



今月の「和讀をすべて示せば、次の通りです。
たとひ大千世界にみてらん火をもすぎゆきて
仮の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり
(『註釈版聖典』五六一頁)

「大千世界にみてらん火」とは、お釈迦さまが

「一切は燃えさかつてゐる、煩惱の炎」によつておひしゃつたように、それぞれが煩惱の炎を燃やし、いろんなものに執着して生きているそのことです。言わ

れてみれば、大半は「不急の事」に過ぎません。

私たちは走りまわつて生きていますが、なんで走つてゐるのか考えてみると、「みんなが走つてゐる走つてゐる」という何とも間の抜けた答えしか出てこなかつたりします。お金や名誉や権力を、燃えさかるにひるで追いかけて、肝心の大切なものは見落としながら、人を傷つけ蹴落として、せつせと走り続けます。

そして、それなりに得られたものがあつたとしても、いよいよ人生の最終局面に達した時、そうして得てきたものは、果たしてその時に至つてもなお、本当に私たちを支えてくれるのでしようか。我が人生とは何だつたんだろうかと、むなしにやりきれなくなるところ」とはいじめないでしようか。

人として、「この境界に生まれた以上」「不急の事」すべてを差し置き、出金わなくてはならないものがあります。親鸞聖人はそれを「火宅無常の世界」、よろひの」と、みなもつてそひ」とたまひ」とある」となまきに、ただ念仏のみぞま」とておはします」(『註釈版聖典』八五四頁)とお示しくださいました。

「お念仏といふ「ま」との教えは、「仮の御名をきくひと」を育てておきます。「(ジ)人のこゑ」もはや迷う人生に退かない「不退」にかなふ」と語ります。今月の「和讀を、もう一度味わつてみてください。
(井上 親運)

仙の御名を ながく不退(ながく不進) かなうが(かなうが)

ながく不進(ながく不進) かなうが(かなうが)

どすん

ようやく長い冬が終わり、春がめぐつてきました。とりわけ、今年の冬は、雪が多く厳しかったので、春になると、うれしいですね。しかし、春になると、いい」とばかりではなく、ちょっと困つことがあります。勝林寺にも、春になると悩まされていましたことがあるのです。

住職から、こんな話を聞かれたことがある「門徒の方は、少なくないと思います。それは、「勝

林寺の本堂の畳は、大風が吹くとフワーッと浮かび上がるんですよ」と。私は、いまだに、実際に浮かび上がったところを目撃したことはないのですが、住職は現場を見たそうです。大風が吹いた翌日の本堂に行くと、畳の下に敷いていたはずの古い新聞紙が、畳の上に何枚も出ていたり、時には、畳と畳が重なり合つたりしている場面は、何度も目にしました。つまり、それは、畳が風といふ自然の力によって、少なくとも10畳くらいは、浮かび上がったに違いないということです。でも、実際目にしてみると、驚きの光景だったようです。(笑) 原因は、本堂の縁の下が高く、西側が吹きぬけになつていて、強烈な西からの風が吹くと縁の下に入り込み、それが東側の壁に当たつて上に向きを変え、床の隙間から強い力となつて、畳を押し上げるというわけです。そのたびに、新聞を拾い集め、畳をひき直し、掃除する」と繰り返していました。特に、春先に多く、強い風の吹いた翌日は、恐る恐る本堂の様子をのぞいていました。しかし、このたび、ようやくその作業から解放される時が来ました。本堂の西側の縁の下の入り口全面に、幅、8cmほどの縦の格子でできた戸を開けていただきました。色も本堂の柱の色に合わせていただきいたので、その部分だけが目立つということもなく、ずっと前からそこにある感をだしています。見た目も本堂にしつくりとなじんでいます。今度お参りの際には、本堂右手に回って、ぜひご覧ください。

(文責 坊守)